母子分離における母親の意識
—“子どもを預ける”サポート先の違いによる意識の比較を中心として—

角張慶子，小池由佳

The Sense of Maternal Separation from Mother's Perspectives

Keiko Kakubari and Yuka Koike

問題と目的

子育ては親が子どもを育てるのみならず、その過程は「親になる」過程でもある。その過程において母親はポジティブ・ネガティブの両感情を同時に抱くアンビバレントな心的状態にあるという（柏木・若松, 1994）。角張・小池・斎藤（2006）によると、乳幼児を育てる母親の多くは「子どもの存在そのもの」に日々「支えられている」と感じているものの、同時にその子どもと常に共に過ごすことでストレスを感じており「子どもと離れる時間が欲しい」とも感じていることが明らかになっている。母親が子どもに対してもつ不快感情が母子関係の中でポジティブな役割を果たす可能性のあること（菅野, 2001）が指摘されているように、ストレスや否定的な感情はそれが適度である限りは必ずしもネガティブな作用をするとは限らない。しかし「密室育児」「育児の孤立化」が懸念される現代の育児スタイルにおいては、母親が適度にストレスを発散しまたは何らかの子どもから離れて「自分自身でコントロールができる時間」をもつことは重要な課題であると考えられる。平成10年版厚生白書（1998）においても「子育ての過剰な期待や責任から、母親を解放させることが望まれる」との見出しの下、就労の有無を問わず他人の手を借りずに子育てすべてを自分でやり遂げることだけが望ましいのではなく、適切な保育サービス等を利用し一定の時間子どもと離れることによって子どもと接する時間をより豊かに大切に過ごせるのであれば、四六時中側にいなくともそれは立派な親としての責任の果たし方であるということが述べられている。

近年それに対応する子育て支援のサポート資源としては、保育所や子育てひろばなどにおける一時保育のサービスの他、親の社会教育を保障する一環としての公民館等における講座や講演会の開催に併設しその間子どもを預かる「一時保育」なども見られるようになってきている。前述の調査において日常の子育ての中で「子どもと離れる時間が欲しい」と感じている母親が多いように、大日向（2005）によると一時保育のニーズは非常に高く増加の一途だと言う。実際、A市の公民館において一時保育併設の講座に申し込んだ人たちに参加動機を尋ねてみると、講座そのものへの興味もさることながら「保育がついていたから」を理由に挙げる人が実は少なくない。同時に、日々のストレスに後押しされて申し込みはしたものの、実際に分離を経験するとなると直前まで「やめようか…と迷った。」という大きな不安や罪悪感のような声が聞かれることもある。前述の大日向においても、母親たちは決して安易に子どもから離れようとせず預けるまでに多くの迷いや躊躇を感じているということを改めて感じたと述べられている。子どもの発達という観点からも養育者と離れて他者と過ごす経験を持つことは重要な事柄であ

幼児教育学科、生活科学科　生活福祉専攻

る(Rutter.M&Harsov.L, 1977/1982、安藤, 1995)が、それには子どもが「安心できる」環境において分離を経験することが必要であろう。その意味において母親たちが分離前に多くの心遣いをすることは大切な過程であるが、躊躇が過度なものになれば利用できるサービスも利用に結びつかないことが懸念される。すなわち、母親たちが躊躇いつつもサポート先について適切な情報を得て子どもに配慮をしながら必要なサービスを安心して利用できることが母子双方の発達にとって望ましいと思われる。そこで本報告では、母親が一時的に子どもと離れる際にどのような意識をもつのか、特に身内に預ける場合と一時保育を利用した場合の違いを比較することで、今後必要な支援の在り方を検討したい。

方法

1．調査協力者および実施方法

A市B公民館における事業に申し込みをしたことのある乳幼児をもつ母親79名を対象に郵送法にて質問紙を配布・回収した。回収された質問紙は46名（有効回収率59.5%）であった。調査実施時期は2008年5月から6月の間であった。調査協力者の属性はTable 1に示すとおりである。

Table1　調査協力者 基本属性　N=46

年齢	平均 32.7歳 (SD 4.1，年齢範囲 27～45歳)	
就業状態	専業主婦	33(71.7%)
	パートタイム勤務	5(10.9%)
	フルタイム勤務	6(13.0%)
	育児休業中	2(4.3%)
家族形態	核家族	38(82.6%)
	拡大家族	8(17.4%)
子どもの人数	1人	33(71.7%)
	2人	12(26.1%)
	3人	1(2.2%)
第一子の年齢	1歳台	24(52.2%)
	2歳台	8(17.4%)
	3歳台	7(15.2%)
	4歳～10歳	7(15.2%)
末子の年齢 (第一子と重複あり)	0歳台	6(13.0%)
	1歳台	27(58.7%)
	2歳台	8(17.4%)
	3歳台	5(10.9%)

2．調査内容

1）基礎情報：年齢、家族構成、子どもの人数・性別・年齢、就業状況

2）他者に子どもを預けての母子分離経験について：以下の項目に関して、預け先サポート別の経験や意識についてそれぞれ尋ねた。預け先のサポート資源としては、「家族・身内（夫・親・きょうだいなど)(＝以下「身内」と表記)」「公民館の講座や催しにおける保育（保育付き講座の利用)(＝以下「公民館保育」と表記」「保育所や子育て広場などの公的な一時保育サービス（＝以下「一時保育」と表記)」の3種を設定した。項目は以下の通り。(1）サポート資源の利用経験の有無、(2）経験なしの場合の理由、(3）経験ありの場合、初めて利用した子どもの年齢、具体的預け先(身内・一時保育)、動機（公民館保育)、初めて分離経験した際の母親の意識（身内18項目、公民館保育および一時保育19項目)。分離意識については、サポートを利用する前には具体的にどのような事柄に対して不安を抱いているのかを尋ねる項目（身内4項目、公民館保育及び一時保育5項目)、分離中の意識（子どもへの懸念・自分自身の感情）を尋ねる項目（8項目)、経験後の意識を尋ねる項目（6項目）を設定した。項目の決定にあたっては、先行研究（Hock et al.　(1989)、水野（1998)、角張（2003)）を参考とした。いずれのサポート先についても「初めて分離を経験したとき」のことを回想してもらい、「とても思った／やや思った／あまり思わなかった／まったく思わなかった」の4件法で回答を求めた。

3）母子分離や子どもを預けることについての自由記述、公民館保育や一時保育などサービスに関する自由記述、その他自由記述

結果と考察

1．サポート別の分離経験

「身内」「公民館保育」「一時保育」の子どもを預けるサポート別の分離経験はTable 2のと

Table2　サポート別 母子分離経験の有無　人数(%)

預け先	経験なし	経験あり
身内(夫・両親・きょうだいなど)	2(4.3%)	44(95.7%)
公民館の講座・催しにおける保育	10(21.7%)	36(78.3%)
公的な一時保育	30(65.2%)	16(34.8%)

おりであった。経験ありの人のうち、「身内」の預け先としては、自分や夫の親が29名（63.0%）と一番多く、ついで夫12名（26.1%）であった。初めて預けた年齢は0ヶ月から3歳と幅広いが、93.2%の人が1歳未満で初めての経験をしていた。「公民館保育」については、その利用動機は講座そのものへの興味が33名（91.7%）で、保育の利用自体が動機である人も3名（8.3%）みられた。初めて預けた年齢については4～6ヶ月が36名中15名と42.9%を占めていたが、これはA市が公民館において当該年齢の子どもをもつ母親を対象に「乳児期家庭教育学級」という連続講座の事業を行っており、さらに今回の調査方法が公民館の利用者を対象としたことによると考えられる。「一時保育」については保育所における一時保育が10名（62.5%）、子育てひろばが5名（31.3%）であった。

経験なしの場合のこれまでにそのサポートを利用しなかった理由についてはTable 3のとおりである。「身内」においては経験なしの2名とも「近くに預けられる身内がいない」ことを理由の一つにあげている。「身内」サポートは調査対象者の95.7%が経験ありと答えていることからも、子育てにおいて特に緊急時などは重要なサポート源の一つであると考えられる。そのサポートが物理的に受けられないということは大変不安なことであろう。自由記述においても“実家が近いから今は良いが転勤したら一時保育などを利用したい”などの声も聞かれることから、転勤や家庭の事情等で身内のサポートが受けられない場合には身内のサポートを利用するのと同じように他のサポートを受けられるようサービスを整えていく必要があるであろう。

Table3 サポート別 経験していない理由 人数(複数回答)

	身内 N=2	公民館保育 N=10	一時保育 N=30
近くにいない／預けられることを知らない	2	3	4
断られたので	0	2	0
母乳などの都合	1	2	5
どんな人が預かってくれるのかが不安で		3	5
子どもが迷惑をかけるのではないかと思って	0	4	2
子どもが嫌がったり泣いたりするので	1	4	7
周りの反対	0	1	1
周りの目が気になって	0	0	0
年齢的にまだだと思う	0	1	1
自分が子どもと離れたくないから	0	0	1
預ける必要を感じない	0	0	19
費用がかかるので			9
その他	0	1	2

次に「公民館保育」経験なしの理由については、子どもが迷惑をかけたり嫌がったりするという子どもの状態による理由をあげている人が一番多い。ついでサポート先の保育者に対しての不安、そしてサポートの存在を知らなかったことによる理由が挙げられている。「一時保育」については「預ける必要を感じない」が一番多いが、自由記述を見ると「身内」サポートが受けられているために必要を感じないという人が多いようである。次に「費用」の問題、そして子どもが嫌がるという理由、保育者への不安などが挙がっている。

上述したように本調査の調査協力者の特性上、一概に「公民館保育」と「一時保育」の比較はできないが、自由記述を見ると“気軽に預けられる場所だとは思えない”“公民館に比べ預けづらい印象がある”“仕事をしていないのにお金を払ってまで預けることに抵抗がある”など「一時保育」への物理的・心理的ハードルが高いことがうかがえる。より身近なサポート資源としての「一時保育」のあり方を検討することは今後の課題とする。

2．分離時の母親の意識の検討

母親が初めて子どもと離れたときの意識について、より身近で馴染みのある「身内」に預けた場合と身内以外の他者に預けた場合との意識を比較するために、本報告では「身内」「公民館保育」の両方の経験があると答えた36名について検討を行う。預ける前、預けている間そして預け終わった後にそれぞれどのような意識を持っていたかについて各項目「とても思った＝4、やや思った＝3、あまり思わなかった＝2、全く思わなかった＝1」として平均得点を算出したものがTable 4である。さらに、対応のない「項目3」を除き、それぞれの項目ごとにt検定を用い比較を行った（Table 4）。

その結果、19項目中13項目で有意差が見られた。分離前に子どもが過ごす場所（Figure 1）や何をして過ごすかといった預け先に対する懸念は「身内」に預ける前より「公民館保育」に預ける際のほうが高い。また、預ける際に子どもが離れることを嫌がるのではないかという懸念についても同様である。母親自身が馴染みの

Table4　分離時の母親の意識の得点平均と預け先の違いによる比較(T検定)　　得点平均(SD)

	身内	公民館保育	t値	P
1 預ける前、子どもがどのような場所で過ごすのか気にかかった	1.94(.90)	3.40(.70)	-7.5	**
2 預ける前、子どもが何をして過ごすのか気にかかった	2.86(1.03)	3.43(.74)	-3.5	**
3 預ける前、子どもがどのような人とすごすのか気にかかった(「身内」は該当項目なし)	—	3.51(.66)	—	(比較なし)
4 預ける前、周囲の人がどう思うかが気にかかった	1.57(.82)	1.71(.79)	-1.2	
5 預ける前、子どもが離れることを嫌がるのではないかと心配した	2.91(1.04)	3.54(.66)	-3.2	**
6 預けている間、子どもが淋しがっているのではないかと気にかかった	2.89(1.04)	3.31(.71)	-2.5	*
7 預けている間、子どもが不安がっているのではないかと気にかかった	2.80(.96)	3.37(.65)	-3.3	**
8 預けている間、子どもが迷惑をかけているのではないかと気にかかった	2.43(1.04)	2.77(.84)	-2.7	*
9 預けている間、子どもの要求をうまく対処してもらえているか気にかかった	2.86(1.05)	3.08(.69)	-1.4	
10 預けている間、子どもが側にいなくて淋しく思った	2.94(.75)	2.75(.81)	1.5	
11 預けている間、子どもが側にいなくて楽しめなかった	2.11(.82)	1.78(.49)	2.6	*
12 預けている間、自分が「ホッと」しているのを感じた	2.83(.91)	3.03(.81)	-1.9	
13 預けている間、自分が充実した時間を過ごしていると感じた	2.81(.98)	3.53(.65)	-4.9	**
14 預け終わった後、子どもが良い経験をしたと感じた	2.44(.94)	3.53(.65)	-7.2	**
15 預け終わった後、子どもの意外な面を知ることができた	2.47(1.06)	3.11(.82)	-3.7	**
16 預け終わった後、子どもを過ごすことを新鮮に感じた	3.20(.76)	3.57(.61)	-3.4	**
17 預け終わった後、自分の意外な面を知ることができた	2.17(1.00)	2.44(.88)	-1.8	
18 預け終わった後、またこのような機会を持ちたいと感じた	3.08(.91)	3.61(.60)	-4.3	**
19 預け終わった後、もっと早いうちからこのような機会を持ちたかったと感じた	2.06(.92)	2.61(1.05)	-2.9	**

**P<.01　*P<.05

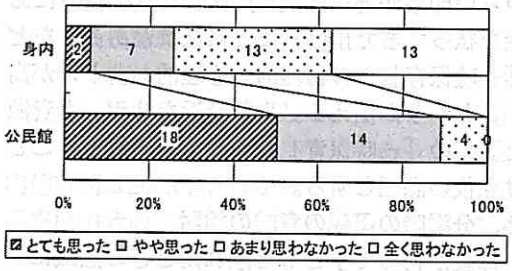

Figure1　項目 1(場所への気がかり)　人数

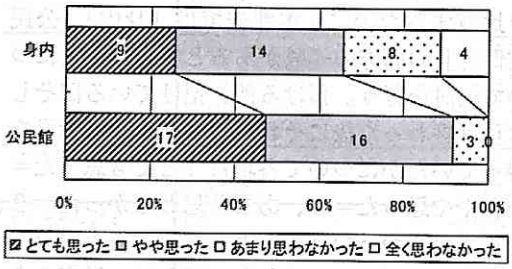

Figure2　項目 7(子どもが不安)　人数

ある場所や人に預ける場合と比較すれば、馴染みの薄いサポート先への不安が高くなるのは最もではあると考えられるが、事前に場所や過ごし方といった情報をより丁寧にサポート利用者に伝えることの重要性が示唆される。

分離中については、子どもが淋しがっているのではないか・不安がっているのではないか（Figure 2）・迷惑をかけているのではないかという懸念についても分離前と同様に「公民館保育」の方が高い。得点を見ると「身内」においてもこのような懸念はもちろん見受けられるが、「公民館保育」では Figure 2 でみるようにその多くが「とても・やや思った」と答えていることがわかる。しかし、分離前・分離中ともより強く心配をしているものの、子どもが側にいなくて楽しめなかったという分離中のネガティブ感情の喚起に関しては「公民館保育」の方が「身内」に比べて低く（Figure 3）、反対に自分が充実した時間を過ごしていると感じるポジティブな感情の喚起は「公民館保育」の方が高い（Figure 4）。身内のサポートは先述のように大変心強いサポートである。しかし、角張（2004）、塩崎・無藤（2006）では、夫や自分の母親などのもついわゆる「伝統的育児観」に母親の分離行動や意識は影響を受けることが示されている。すなわち、身内ゆえに遠慮をしたり、預ける人の分離に対する認識によっては快くは預けることができなかったりするということが考えられるのである。自由記述においても“実の母を頼りにはしているが、正直なところ迷惑では…と心配している”“実母に預けるがあまり頻繁には預けられないし、のんびりもしきれない”といった遠慮の声や“姑に預けるが「今の子はいいわねぇ」などと言われ、育児は女がするものという意識を感じてストレス”

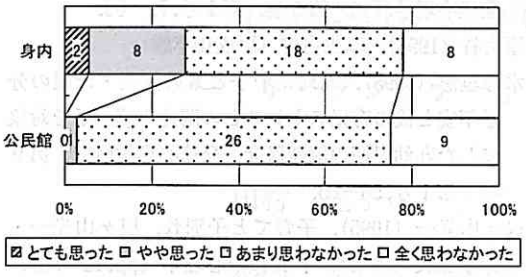

Figure3　項目 11(楽しめない)　人数

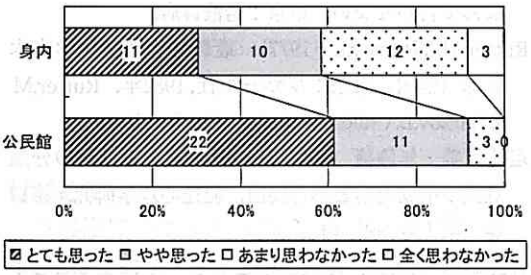

Figure4　項目 13(充実した時間)　人数

といった声が聞かれる。ここでは身内ではない第三者に預けるからこそ、より安心して充実した時間を楽しむことができることが示されたと言えよう。

分離経験を終えた後の意識については、自分と離れて過ごすことで子ども自身も良い経験をしたのだと感じた（Figure 5）のは「身内」より「公民館保育」の方で高く、子どもの意外な面を知ったり子どもと過ごすことを新鮮に感じたりというような母子の関係にとってプラスであったと感じることが高かったのも同様であった。さらに、またこのような機会を持ちたい（Figure 6）やもっと早くから経験したかったという気持ちについても「公民館保育」の利用時の方がより強く感じていた。

また、得点の比較においては有意差が見られなかった項目について検討すると、周囲の人の目に対する意識（項目４）はどちらのサポートを利用するにも高くはなく、反対に、預けている間子どもの要求をうまく対処してもらえているのかという懸念（項目９）および自分自身が「ホッと」しているという感覚（項目12）についてはどちらのサポートを利用しても高いということがわかる。

以上の結果より、母親はいずれのサポート資源を利用するにしても分離中の子どもへの心配や不安といった懸念はもっているということ、そしてそれは「身内」ではない人に預けるときにはさらに強く感じているということが明らかになった。しかし、分離経験によって母子ともに得られるものは決して少なくなく、「身内」というサポート資源の重要性もさることながら、身内とは違った「他者」に子どもを預けることの有意性が示唆されたと考えられる。

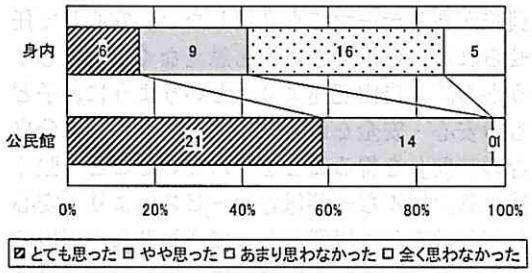

Figure5　項目 14(子ども良い経験)　人数

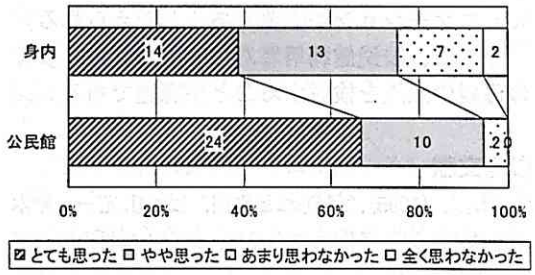

Figure6　項目 18(また機会を持ちたい)　人数

全体的考察

母親の分離に対する意識は、サポート先すなわち「誰に預ける」ことによって分離を経験するかによって、その意識の強さは異なることが明らかになった。「子育て」とは「子別れ」の過程（根ヶ山,1995）と指摘されるように、母子分離は母子双方の発達にとって重要なトピックであると考えられるが、サポート先の違いを考慮して母子分離に関する検討を行うことが重要であろう。

また、身内に預けるより「公民館保育」といった身内以外の他者に預けることによって、母親自身がより充実した時間を過ごしたり、子ど

もにとってそして母子関係にとって「良い」経験であったと感じたりすることができることが明らかになった。今後、「公民館保育」をはじめとして一時保育サービスのより一層の拡大と充実が望まれる。同時に、分離に対する不安や心配は高い。母親たちは“以前ある連続セミナー（公民館ではない）の保育を利用した際、保育者の態度を不愉快に思い不信感があったので途中で受講をやめたことがある”“「保育カード（筆者注：子どもの様子を利用者と保育者が共有するために記入するカード）」のない講座は興味があるテーマでも利用しない。安心して任せられる、信用できる人と思えなくなってしまうから。”（自由記述より）というように、子どもの安心・安全を最大限考慮しながら「自分自身の時間」を得ることを望んでいることを強く感じる。様々な一時保育サービスがより「安心して預けられる場所」として認知され、利用者の不安が軽減されるためには、事前の情報提供や保育終了後の情報交換などより決め細やかなサポートや、保育者と利用者とのより丁寧なコミュニケーションが必要であると考えられる。

今後は、公民館利用者だけでなく、より多くの母親の意識を検討することが課題である。

参考文献

安藤明人（1995）．子別れと集団．根ヶ山光一・鈴木晶夫(編著)，子別れの心理学，東京：福村出版，165－179.

Hock,E.,McBride,S.,& Gnezda,M.T.（1989）．Maternal Separation Anxiety : Mother-Infant Separation from the Maternal Perspective. Child Development, 60, 793－802.

角張慶子（2003）．幼児を持つ母親の分離不安－夫からの情緒的サポートに着目して－．東北大学教育学研究科研究年報，第51集，159－170.

角張慶子（2004）．乳幼児をもつ母親の「分離不安」．家庭教育研究所紀要，第26号，84－94.

角張慶子・小池由佳・斎藤裕（2006）．子育て支援に関する心理・福祉学的アプローチ（2）―地域子育て支援センター利用者におけるサポート感―．日本保育学会第59回大会発表論文集，1046－1047.

柏木恵子・若松素子（1994）．「親となる」ことによる人格発達：生涯発達的視点から親を研究する試み．発達心理学研究，第5巻，第1号，72 - 83.

厚生省（1998）．厚生白書（平成10年版）．

水野里恵（1998）．乳幼児の子どもの気質・母親の分離不安と後の育児ストレスとの関連：第一子を対象にした乳幼児期の縦断研究．発達心理学研究，第9巻，第1号，56－65.

根ヶ山光一（1995）．子育てと子別れ．根ヶ山光一・鈴木晶夫（編著），子別れの心理学（pp.12－30）．東京：福村出版．

大日向雅美（2005）．「子育て支援が親をダメにする」なんて言わせない．東京：岩波書店．

Rutter,M.&Harsov,L（1977）．最新児童精神医学高木隆郎（監訳）東京：ルガール社，1982年．Rutter,M.&Harsov,L. Child psychiatry. Blackwell.

塩崎尚美・無藤隆（2006）．幼児に対する母親の分離意識：構成要素と影響要因．発達心理学研究，第17巻，第1号，39－49.

菅野幸恵（2001）．母親が子どもをイヤになること：育児における不快感情とそれに対する説明づけ．発達心理学研究，第12巻，第1号，12－23.

付記：調査にご協力いただきましたお母様方、および、A市B公民館の方々にこの場を借りて心より感謝申し上げます。